

レーダ・ラファネッリの『社会素描短編 (Bozzetti sociali)』におけるジェンダーと階級

Gender and Class in Leda Rafanelli's *Social Sketches (Bozzetti sociali)*

小久保 真理江
KOKUBO Marie

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

著者抄録

本論文では、レーダ・ラファネッリの短編集『社会素描短編 (Bozzetti sociali)』についてジェンダーと階級に焦点を当てながら論じる。『社会素描短編』は、「ブルジョワ対プロレタリア」の二項対立図式に基づいて階級間の不平等や搾取の問題を中心的に描いているが、同階級の男女の描かれ方には差異もあり、そこには同階級の男女が置かれた状況の差異についての意識が反映されている。下層階級の登場人物は、男女ともに貧困や過酷な労働の犠牲者として同情的に描かれる傾向にあるが、男性については兵役における自由の剥奪や労働中の事故死などの問題に光が当てられていることが多いのに対し、女性については、衰弱や病死、性的対象化や性的搾取、望まない妊娠などの問題に光が当てられていることが多い。上流階級の登場人物の多くは、男女ともに労働者階級を搾取する自己中心的で我儘な人間として批判的に描かれる傾向があるが、男性が脇役としてしか登場せず、彼らの視点や内面が語られることがほとんどないのに対し、女性は主役として登場することが多く、彼女たちの視点や内面、とりわけ彼女たちの不満や苛立ちや孤独感が描かれている。

Summary

This paper discusses Leda Rafanelli's *Bozzetti sociali (Social Sketches)*, a collection of short stories focusing on gender and class. Although *Social Sketches* primarily depicts, on the basis of the dichotomy of “bourgeoisie and proletariat,” class-based problems of inequality and exploitation, there are differences in the ways men and women of the same class are portrayed that reflect an awareness of differences in situations often confronted by men and women. Lower-class characters are generally portrayed sympathetically, as victims of poverty and harsh labor conditions, but there are gender differences in the issues that the stories focus on: while a number of lower-class male characters face such issues as deprivation of liberty while in military service and accidental death at work, a number of lower-class female characters face such issues as debilitation and death from disease, as well as sexual objectification/exploitation and unwanted pregnancies. Upper-class characters are generally portrayed critically, as egoistic, selfish exploiters of the working class, but while upper-class men appear only as side characters, with almost no descriptions of their personal perspectives or inner feelings, upper-class women often appear as main characters, with descriptions of their personal perspectives and inner feelings—particularly of their dissatisfactions, frustrations, and feelings of loneliness.

キーワード

ラファネッリ イタリア 文学 アナキズム 階級 ジェンダー

Keywords

Rafanelli; Italy; literature; anarchism; class; gender

原稿受理日：2024.1.28.

Quadrante, No. 26 (2024), pp. 101–127.

目次

はじめに

1. レーダ・ラファネッリの生涯と作品

2. 先行研究の状況

3. 『社会素描短編』の分析

3-1. 『社会素描短編』の概要と序文

3-2. 下層階級の登場人物

3-3. 上流階級の登場人物

おわりに

はじめに

本論文では、レーダ・ラファネッリ (Leda



Rafanelli)¹の短編集『社会素描短編 (Bozzetti sociali)』におけるジェンダーと階級の表象について論じる。ラファネッリは1880年から1971年まで生きた作家で、詩・短編小説・長編小説・評論など数多くの作品を出版した。日本では翻訳・紹介されておらず²、イタリアでも広くは知られていない作家であるため、まず、レーダ・ラファネッリの伝記的情報と作品、先行研究について概説してから、『社会素描短編』について論じる。

1. レーダ・ラファネッリの生涯と作品³

レーダ・ラファネッリは1880年にイタリア中部トスカーナ州の小都市ピストイアに生まれた。両親や家庭環境について詳しくは分かっていないが、母親は労働者階級の貧しい家庭出身で、父親は中流階級の家庭出身だったと言われている (Pakieser 18)⁴。

幼いレーダは、小学校3年生まで学校に通い⁵、1890年代から印刷所で植字工見習いとして働きはじめた。1890年代に家庭環境に大きな変化があったと思われるが、本人はこのことについて語っておらず、詳細は明らかになってはいない。先行研究では、1890年代に父親が(政治的犯罪ではない)何らかの罪で禁錮数年の実刑判決を受けたと推測されている (Pakieser 20, 30; Masini 8)。印刷所で

働きはじめたラファネッリは、職場で多くの書物の言葉に触れることを通して文化と政治思想を学び、同僚のアナキストの影響を受けてアナキズムに傾倒していった⁶。15歳のときから詩や短編小説を書くようになり (Pironi “Leda Rafanelli. Una scrittrice” 103)、1897年には弟と共同で詩集『考え (Pensieri)』を出版した。

その後、1900年頃にエジプトに渡航し、3、4ヶ月ほどアレクサンドリアに滞在したと言われている。ラファネッリはのちに自身のエジプト滞在経験について語っているが、なぜエジプトに渡航したのか、そしてなぜ数ヶ月だけでイタリアに戻ってきたのか、エジプト滞在では誰と一緒にいたのか、などの詳細については語っていない。エジプト渡航や滞在を証明する書類も見つかっていないため、本当にエジプトに滞在していたかどうかは確実にわかっていない。先行研究では父親の実刑判決による環境の変化が渡航の理由だったのではないかと推測されている (Pakieser 30; Masini 8)。エジプト滞在中にはアレクサンドリアのアナキストと交流があり、後に夫となるアナキストのルイジ・ポッリ (1870-1922) と最初に出会ったのもアレクサンドリアだったと言われている。また、エジプト滞在をきっかけにラファネッリはイスラム教を信仰しはじめ、その後イタリアに戻ってからもイスラム教を信仰しつづけた。

¹ 先行研究 (Pierotti 71) によると、ピストイア市の出生登録に記録されている本名は Bruna Leda Rafanelli だという。レーダ・ラファネッリは作品執筆・発表の際に偽名を使うことも多かった。ラファネッリが使ったさまざまな偽名については、Chessa (“Introduzione” 22) を参照。

² 日本語文献に関して本論文の筆者が知る限りでは、戸田 (380-381) の著作にわずかな言及があるのみである。

³ この章の執筆にあたっては、Boccolari, Granata, Masini, Pakieser, Pierotti, Pironi, Chessa “Leda Rafanelli” を参照した。ラファネッリは非常に多作であり、未発表の作品も多い。この章で全ての作品の名前をあげることはできないため、代表的な作品のタイトルのみを挙げる。ラファネッリの作品タイトルのリストは Chessa 編 *Leda Rafanelli tra letteratura e anarchia* のなかの Bibliografia の章 (pp. 186-198) で確認することができる。

⁴ 父親の職業について先行研究の多くでは何も言及がないが、Cappellini は “impiegato (ホワイトカラーの賃金労働者)” で “giornalista (ジャーナリスト)” であったと書いている (Cappellini “La sapiente arte” 244)。

⁵ 1877年のコッペーノ法により、19世紀末当時の義務教育期間は小学校3年生までであった。

⁶ アナキズムの思想は多様であり、さまざまな異なる立場・主張のアナキストが存在する。19世紀末から20世紀初頭にかけてのイタリアにも多種多様なアナキズムの思想が存在した。大きな二つの流れとしては、労働者組織を重視するアナキズムの潮流と個人主義的なアナキズムの潮流があったが、それぞれの潮流のなかにも多様な思想や立場が存在した。ラファネッリのアナキズムは、個人主義的なアナキズムとして位置付けられている。Ferri の分析によれば、ラファネッリは、個人主義的なアナキストであり、労働者組織の官僚主義化を批判しているが、自然発生的なサンディカリズムには反対ではなかった (Ferri 77)。

エジプト滞在後、イタリアに戻ってからは、フィレンツェの印刷所で植字工として働きはじめ、1902年にはルイジ・ポツリと結婚した⁷。結婚後、1904年にはポツリと共に出版社を設立し、多くのアナキスト系の政治的な冊子や書籍を出版しはじめた。ラファネッリ自身も軍隊や教会の権力、学校の教育方針などに異議を唱える文章を執筆・発表している。短編・長編小説も執筆・発表しており、1905年には小説『ある愛の夢 (Un sogno d'amore)』を出版した。

その後、1907年にはアナキストの植字工ジュゼッペ・モナンニ (1887-1952) と出会い (Cappellini "La sapiente arte" 245)、私生活の面でも仕事の面でもモナンニが新たなパートナーとなる。1909年にはモナンニと共にミラノに移住し、その後ミラノで出版社を設立した⁸。ラファネッリは雑誌や書籍の出版の仕事に携わりながら、自身の執筆活動をつづけ、1911年頃には短編集『社会素描短編』を、そして1912年には小説『新たな種 (Seme nuovo)』を出版した。

1910年には未来派の画家カルロ・カッラ (1881-1966)⁹ と出会い、二人は1912年に短い期間、交際していたが、ラファネッリは未来派の思想や美学には賛同していなかった。特に、未来派に見られる過去の芸術文化の否定や戦争賛美に対してラファネッリは批判的で

あった。

1913年にはベニート・ムッソリーニに出会い、1913年から1914年にかけての一時期、ムッソリーニとも親しくしていた。当時、ムッソリーニは社会党員で、社会党の機関紙『アヴァンティ』の編集長を務めていた。1914年には、ムッソリーニが第一次世界大戦参戦の立場を表明したことにより二人は対立し、二人の関係は終わった。

第一次世界大戦中は、ラファネッリは反戦を唱える文章をさまざまな媒体に発表した。1915年には、パートナーのモナンニが徴兵から逃れるためスイスに亡命し、1916年から1918年頃にかけての時期ラファネッリは (1910年にモナンニとの間に生まれた一人息子と共に) トスカーナ州にも滞在していた (Cappellini "La sapiente arte" 261)。この時期には、エチオピアで迫害を受けていたユダヤ教徒への連帯活動にもラファネッリは携わっており、ユダヤ教徒のエチオピア人男性と交際していた¹⁰。

第一次世界大戦終了後は、ミラノに戻ってきたモナンニと共に再びミラノで出版の仕事に携わった。彼らの出版社¹¹は、1923年以降ファシズム政権からの弾圧や監視¹²を受けながらも活動を続け、学術書や文学作品を多く出版した。特に外国文学のイタリア語訳の出版が

⁷ 二人の結婚の経緯や詳細は明らかではないが、Pakieser は「ロマンスというよりは友情と保護にもとづいたものだった可能性がある」(37)と推測している。

⁸ モナンニとラファネッリが作った出版社は Libreria Editrice Sociale という名前である。この出版社について Masini は、別の場所 (Sesto San Giovanni) にあった Società Editoriale Milanese という出版社がもとになっていると述べている (Masini 12)。出版社 Libreria Editrice Sociale は、第一次世界大戦後に Casa Editrice Sociale と名前を変え、さらに 1926 年のファシズム政権による弾圧 (出版物の押収) の後には、Casa Editrice Monanni と名前を変えた。

⁹ カルロ・カッラは 1910 年代前半に未来派のメンバーとして活躍した。未来派時代のカッラの代表的作品にはアンジェロ・ガッリ (1904 年ストライキ中に亡くなったアナキスト) の葬儀を題材とした《アナキスト、ガッリの葬儀》(1910-1911) などがある。カッラはミラノで未来派のメンバーだけではなくアナキストとも交流している。未来派とアナキストとの関係性については Ciampi の研究書 *Futuristi e Anarchici* に詳しく書かれている。

¹⁰ このエチオピア人男性 Emmanuel Taamrat (1888-1963) は、フィレンツェのユダヤ教神学校で学ぶため数年前からイタリアに来ていた (Pakieser 129)。ラファネッリは後にこの男性を含めた四人の男性 (Emmanuel Taamrat, Adem Surur, Omar, Agaffari) との関係性を題材にした作品 (『一人の女と四人のオリエントの男たち (Una donna e 4 Uomini d'Oriente)』) の執筆に取り組んだが、この作品は完成せず、部分的に出版されることもなかった。

¹¹ モナンニとラファネッリの出版社は 1919 年から 1926 年までは Casa Editrice Sociale という名前だったが、1926 年のファシズム政権による弾圧の後、Casa Editrice Monanni という名前に変わった (Bonsavvier, ch. 1)。

¹² 出版社に対するファシズム政権の弾圧については、Masini (22) や Bonsavvier (ch. 1) を参照。

多く、1920年代後半に出された作品には、マクシム・ゴーリキー、アレクサンドル・クプリーン、ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレア、オルダス・ハクスリーなどの著作が含まれている (Masini 22)。ラファネッリは自身の作品執筆にも精力的に取り組み、1920年代には小説『群衆の英雄 (L'eroe della folla)』(1920年) や小説『魅惑 (Incantamento)』¹³ (1921年)、短編集『女性と雌 (Donne e femmine)』(1922年)、小説『流星のように (Come una meteora)』(1926年)、『オアシス—アラブの小説 (L'Oasi: romanzo arabo)』(1929年) などを出版した。

1934年にはモナンニが別の女性と結婚して子どもを設けたことにより、二人のパートナーシップが終わり、ラファネッリは出版社の仕事から離れた。1930年代には検閲が厳しくなっていき、以前のような明らかに反体制的で政治色の濃い作品を発表することは難しくなっていた。この時期ラファネッリは、アフリカを舞台とする短編小説や連載小説を子ども向け週刊紙『コッリエーレ・デイ・ピッコリ (Corriere dei piccoli)』に発表している¹⁴。また、1939年には『世界を見る—エリトリアの二人の少年の冒険 (Vedere il mondo: avventure di due ragazzi eritrei)』と題された児童小説を出版している。1940年代には息子とその家族と暮らすため北西部のリグリア州(1941年からサンレモ、1943年頃からジェノヴァ)に移住したが、1944年に息子は腹膜炎で亡くなった。その後ラファネッリは1971年に亡くなるまでジェノヴァに暮らした。

第二次世界大戦後、1946年にはファシズム時代に隠していたムッソリーニからの手紙

(1913年から1914年の期間のもの)を自身の回想と組み合わせた作品『ある女とムッソリーニ (Una donna e Mussolini)』を出版した。1960年代にはカルロ・カッラについての回想にカッラからの手紙を組み合わせた作品を出版しようとしていたが、結局この作品は出版されず、死後の2005年に出版された¹⁵。長年、手相占いの仕事も行っており、その経験を題材にした作品『ある占い師の回想 (Memorie d'una chiromante)』を執筆したが、この作品も生前に出版されることはなく、死後2010年ようやく出版された。晩年にはイタリアのアナキストたちについての回想を執筆することにも取り組んでおり、その一部は1960年代のアナキストの週刊紙に掲載された。

2. 先行研究の状況

ラファネッリはイタリアでも一般的に広く知られている作家ではないが、1970年代からラファネッリについての紹介記事等は存在し、1975年には『ある女とムッソリーニ』が再出版された。この1975年の版に付された Masini の序文はその後の研究の重要な土台となった。1990年代からはラファネッリの作品についての研究論文も発表されており、特に2000年代以降には研究がより盛んになっている。2007年にはラファネッリについてのシンポジウムがイタリアで開かれ、翌年にはシンポジウム録『レーダ・ラファネッリ、文学とアナキーの間 (Leda Rafanelli tra letteratura e anarchia)』が出版された。2012年出版の研究書『イタリアのオリエンタリズム (Orientalismi italiani)』第一巻には Spackman によるラファネッリのオリエンタリズムについての論文が収録されてい

¹³ 小説『魅惑 (Incantamento)』の主人公はムッソリーニをモデルとしている。この作品は1917年から1918年頃の時期に執筆され、Sahra という偽名で1921年に出版された。

¹⁴ Pironi によれば、ラファネッリは1926年から1945年にかけての時期に、複数の偽名を使って『Corriere dei piccoli』に短編小説や連載小説を発表した (Pironi "Leda Rafanelli. Una scrittrice")。

¹⁵ この作品 (*Una donna e un pittore-non-ancora-celebre*) は、2005年出版の *Leda Rafanelli - Carlo Carrà: un romanzo. Arte e politica in un incontro ormai celebre* に収められている。

る。2014年には、ラファネッリについての研究書が Pakieser によって英語で出版された。この本はラファネッリの作品からの抜粋の英訳にも多くのページを割いており、それまで英訳されていなかったラファネッリの作品を英語圏の読者に部分的に紹介する役割も果たした。2000年代以降にはラファネッリの未発表の作品の出版や絶版の作品の再出版¹⁶がイタリアで進んでいるほか、ラファネッリについての研究論文も多く書かれている。

先行研究では、宗教の制度や権力に批判的なアナキストでありながらイスラム教を生涯信仰しつつつけたという側面¹⁷や、中東、アフリカ、インドの思想・文化に傾倒していたという側面が注目される傾向がある。ラファネッリの多数の作品のなかでは特に、1929年の小説『オアシス—アラブの小説』が多くの研究で論じられている。この小説は、20世紀初頭のフランス保護領チュニジアを舞台とした作品である。Étienne Gamalier というフランス人男性風の偽名で出版されており、フランス人男性が書いた作品をイタリア語に翻訳したものであるという体を装っているが、実際はラファネッリがイタリア語で執筆した小説である。反植民主義的な思想を持つフランス人女性のジャンヌ、彼女の友人で植民主義の思想を持つアンリ、その恋人のベルベル人の女性ガムラの3人を主な軸として物語は展開する。作品から読み取れる反植民主義・反帝国主義・反近代西洋文明の思想(近代西洋の資本主義社会・文化に対する批判意識)、そして(近代西洋文明に対するアンチテーゼやオルタナティブとしての)「東洋

文化」への傾倒が特に注目されている。

また、『オアシス』を含めたラファネッリの作品や思想は、ジェンダーの観点からも分析されている¹⁸。ラファネッリのジェンダー観は複雑で多面的であり、ジェンダーの問題に関するラファネッリの言説には非一貫性や矛盾もみられる(Pakieser 82-84)。ラファネッリのジェンダーに関する言説・表象には先駆的な側面もあるが、本質主義的な側面や男性優位主義的な側面もある。

ラファネッリの作品には、女性に対する抑圧や家父長制に対する問題意識が見られるが、ラファネッリは同時代の「ブルジョワ女性」たちの女性運動に対しては批判的であった。1904年に発表された文章のなかでラファネッリは次のように述べている。

プロレタリア女性はたいてい精力的に抑圧に対して闘っている。ブルジョワ女性(中略)も反乱を起こしはじめた。だが、誰に対して反乱をしているのだろうか？ 男性に対してである。そうだ。ブルジョワ女性は、フェミニズムという一つの問題しか提議していない。ブルジョワ女性は、一つの目標しか掲げていない。その目標とは、勉強において男性たちに追いつき、職業において男性たちを真似し、男性たちと同等の存在として認められるようになることだ。(中略)おそらくブルジョワ女性は自分の理想を妨げる障害物は男性であるとみなし、男性と闘っている。社会全体と闘うよりも男性と闘う方が簡単だ。(中略)フェミニズム

¹⁶ 『レーダ・ラファネッリ—カルロ・カッラ、小説、すでに有名な出会いについての芸術と政治(Leda Rafanelli - Carlo Carrà: un romanzo. Arte e politica di un incontro ormai celebre)』(2005年)、『ある占い師の回想(Memorie d'una chiromante)』(2010年)、『二つの贈り物とその他のオリエントの短編小説(I due doni e altre novelle orientali)』(2014年)、『オアシス—アラブの小説』(2017年)、小説『魅惑(Incantamento)』(2022年)。これらの本の序文や後書きも重要な先行研究として挙げられる。

¹⁷ ラファネッリのアナキズムとイスラム信仰については Ferri の論文で詳しく分析されている。

¹⁸ ジェンダーの観点からラファネッリについて論じている文献としては、Boero, D'Aniello, Guidoni, Marchese, Pakieser, Pierotti, Pironi, Rossetti, Raouf Tantawy, Spackman が挙げられる。

は現代社会の有害な産物だ。フェミニズムは、女性弁護士を生み出すことしか目指していない。女性弁護士は男性弁護士と同様、来るべき未来の社会においては無益だ。なぜなら、わたしたち民衆は法律や裁判所が無益になり排除されることを望んでいるのだから。¹⁹ (qtd. in Ciampi “Leda Bruna Rafanelli” 30)

「ブルジョワ女性」が(国家の制度や階級間の不平等・搾取構造を保ったまま)男性と同じ権利を獲得しようとする運動が「フェミニズム」であるとラファネッリは捉えているように思われる。実際の当時の女性運動は一枚岩ではなく、さまざまな異なるタイプの女性運動が存在した²⁰。また、当時の女性運動は、「ブルジョワ女性」の問題だけではなく女性労働者の問題にも取り組んでいた²¹。そのことをふまえると、上記のラファネッリの言葉は同時代の女性運動をかなり単純化して捉えているように思われる。

ただし、アナキストであるラファネッリが目指していたようなラディカルな社会変革を当時の女性運動の活動家の多くが目指していなかつ

たのは事実だろう。また、当時の女性運動の活動家には貴族やブルジョワ階級の女性が多かったため、その点でもラファネッリの目には「ブルジョワ女性の運動」であると映ったかもしれない²²。ラファネッリは、男女間の不平等よりも階級間の不平等に対してより強い問題意識を持っており、社会制度を抜本的に変えなければ、抑圧と隷従からの真の解放は実現されないと考えていた。上記の引用で、ラファネッリは同時代の女性運動を単純化し「有害」と決めつけ女性運動の意義を無視してしまっているが、女性への差別や抑圧の問題について無関心であったわけではなく、抜本的な社会変革による解放を願っていたと言えるだろう。

ラファネッリについての先行研究においては、『社会素描短編』はほとんど分析の対象として取り上げられていないが、『社会素描短編』も、ジェンダーと階級の問題やその表象について考える上で、示唆に富む作品である。そこで本論文は、ラファネッリについての先行研究における議論もふまえた上で、『社会素描短編』における階級やジェンダーの表象について論じる。

¹⁹ 原文: Mentre la donna proletaria si occupa più o meno energicamente a combattere l'oppressione, la donna borghese [...] è insorta essa pure. Ma contro chi? Contro l'uomo: contro il maschio. Sì, essa non ha fatto che una questione: il femminismo; non ha avuto che uno scopo: raggiungere l'uomo nei suoi studi; imitarlo nelle sue professioni, arrivare ad essere paragonata uguale. [...] Forse la donna borghese troverà l'ostacolo alle sue idee nell'uomo e lo combatte, riuscendole certo più facile combattere il maschio che tutta una società [...] il femminismo è un frutto nocivo della società presente, che non tende ad altro che a fare delle avvocatesse; le quali, come gli avvocati, saranno perfettamente inutili nella società avvenire, dal momento che noi, popolo, vorremmo rese inutili e quindi eliminate leggi e tribunali.

²⁰ de Grazia は、20世紀初頭の女性運動には少なくとも、(1) 社会主義の系統の運動、(2) カトリック女性の運動、(3) ブルジョワの非宗教的な運動 (lay-bourgeois movement) の三つの流れがあったと述べている (21)。勝田は、(3) のタイプを「世俗的女性運動」と訳した上で、この de Grazia の分類について以下のように述べている。「当時のイタリアでは社会主義の理念や組織が民主主義的な思想や運動と明確に区別されていないことや、「世俗的女性運動」に含まれる諸組織の多様性を考えると、この分類には適切とはいえない面もあるとはいえ、女性運動に限らずイタリアの運動は、理念的整合性や確立された組織を欠いたまま人間関係をもとに進められる傾向が強く、ほかに有効な整理の仕方を見つけることもまた困難である」(105)。Wilson もこの時代のイタリアの女性運動が多様であり分類が困難であることに言及し、次のように述べている。「実際のところ、さまざまな異なるフェミニストの声が数多く存在した。それらの声の政治思想やジェンダー問題の分析はそれぞれに大きく異なっていた」(ch. 2)

²¹ 世紀転換期のイタリアの女性運動について勝田は以下のように述べている。「イタリアでは、女性労働者の問題に対しては、他の先進諸国にはみられない広範な闘争が展開された。デ・グラツィアも述べているように、イタリアの女性運動には、女性の解放は労働者の解放と不可分であるとの認識が強くみられる」(110)

²² Wilson はこの時代の女性運動について次のように述べている。「イタリアの多くの女性解放運動家は、労働者階級の女性を含む全ての女性の権利のための活動をしていたが、ブルジョワか貴族であった。社会主義運動の系統の女性には、プチブルジョワの女性 (特に多くの小学校教師) もいたが、大部分の女性解放運動家は上層階級に属していた。大部分は都市の女性であり、農民の状況を知らないか農民の状況について無関心であった (ただし、彼女たちが提案した法改正のいくつかは農村の女性も救うことになるということとは言うべきであろう)」(ch. 2)

3. 『社会素描短編』の分析

3-1. 『社会素描短編』の概要と序文

『社会素描短編』は、20世紀初頭の社会に生きるさまざまな人びとの姿を描いている短編集である。この短編集の初版は1910年あるいは1911年だと思われるが²³、この短編集に収められている作品のいくつかはすでに1900年代に雑誌に掲載されている。主人公は、工場労働者・鋤夫・農民・お針子・メイド・娼婦・失業者・浮浪者など下層階級の貧しい人びとが多いが、中・上流階級の人びとも登場する。物語の舞台に関しては、「シチリア」や「フィレンツェ」など、具体的な地名が出てくる短編もあるが、多くの作品では地名が書かれていない。

各短編は平均的に4頁から6頁ほどの非常に短いものであり、平易なイタリア語で書かれている。ほとんどの作品は、物語世界外の語り手が三人称で物語を語る形式となっている²⁴。ただし、語り手は完全に客観的な存在ではなく、主人公の内面に入り込み、主人公の視点から三人称で出来事を語ることが多い。作品によっては、同一作品内で複数の人物の内面に入り込み、複数の視点から物語を語ることもある。また、物語世界外の語り手の意見や皮肉、修辭的疑問文が差し挟まれることもある。自由間接話法で登場人物の思考が記述されることも多く、そのような箇所では、語り手の声と登場人物の心の声が重なり合い、読者は登場人物の心の内側に導かれる。語り手の思考なのか登場人物の思考なのか明確ではなく、どちらにも解釈可能と思われるような箇所もある。作品のなかでは多くの会話が直接話法で記されて

おり、登場人物の会話をその場で直接聞いているかのような感覚を読者に与える。また、会話文だけでなく語りの文にも中断符や感嘆符が頻繁に使われており、口語的な語りの感覚を与えている。

これらの短編小説は、アナキズムの思想を広めるという目的²⁵とともに執筆・発表された作品であり、下層階級の人間は「上流階級の人間に抑圧・搾取される善良な人間」として描かれ、上流階級の人間は「下層階級の人間を抑圧・搾取する墮落した人間」として描かれる傾向が強い。ただし、そのような図式には必ずしも当てはまらない部分もある。

短編集のタイトル『社会素描短編 (Bozzetti sociali)』の「sociali」という言葉は「社会の」という意味を持つ。「bozzetti」という言葉は、「デッサン」や「スケッチ」などの意味も持つが、一般的に文学の文脈では「短い物語作品」を指すのに使われる言葉である。特に日常生活を「写実主義的な調子と印象主義的な生彩」²⁶とともに描く短い物語作品を指すことが多い。本論文ではこうしたニュアンスをふまえて、このタイトルを『社会素描短編』と訳すこととした。

ラファネッリは序文のなかで、「Bozzetti sociali」の単数形である「bozzetto sociale」という言葉やこの短編集の特徴について説明している。

「bozzetto sociale」は、感じられた印象や体験された感覚を書いたわずかなページのなかで、現代の生活の多様な側面を表現する。小説家が見ていない人びと、そし

²³ D'Aniello と Pakieser は初版を1910年と記載している一方、Pierotti、Spackman、Fonda は初版を1911年と記載している。本論文では（初版が入手困難であったため）初版ではなく1921年の版を参照している。

²⁴ 一人称の語り手が登場する作品は、Gentilezza borghese、Galeotti、Un nihilista、Lacrime の四つのみである。このうち語り手が主要登場人物でありその人物像がある程度分かるのは Galeotti のみである。Un nihilista や Lacrime では一人称が使われているのは冒頭の一文のみである。

²⁵ アナキズム運動におけるプロパガンダについては、キンナ (104-108) や Pakieser (47-48) を参照。

²⁶ 辞典 Treccani オンライン版の定義からの引用：<https://www.treccani.it/vocabolario/bozzetto/>。

原文：In letteratura, racconto breve, che descrive con piglio realistico e vivezza impressionistica una situazione, un luogo, un carattere, tratti per lo più dalla vita di ogni giorno.

て歴史家が知らない人びと。凍えるほど寒い灰色の夜の霧の中で、浅瀬の陰鬱な闇の中で、現代の渦である工場の中で、さらには太陽の降り注ぐ海の浜辺で、彼らが動きまわる。動きまわる彼らをその周りの群衆から区別できる特徴がないため、小説家には彼らが見えないし、歴史家は彼らを知らない。彼らは家やあばら屋、鉱山の奥底に、牢獄の冷たい孤独の中に、修道院の静寂の中にいる。苦しみや痛み犠牲者。現行の法の因習の支配を受けている人びと。痛みと怒りを抱えた反逆者たち。誰からも命綱を投げてもらえない遭難者のような生活を送る男や女や子どもたち。²⁷ (5) [下線は引用者による]

貧しい庶民の厳しい日常生活を写実的に描く文学潮流としては、ジョヴァンニ・ヴェルガなどの作品に代表されるヴェリズモが19世紀から20世紀初頭にかけて興隆しており、ラファネッリはヴェリズモに影響を受けていると言えらるだろう²⁸。ただし、ラファネッリの序文には「小説家が見ていない人びと」という言葉があり、既存の文学で十分に描かれていないような人びとの姿を描くのだという意識があると言えらる。また、上記の引用では「現代の・新しい」という意味の「moderno」という形容詞が二度使われており、19世紀的世界とは異なる同時代の新

たな現実を描くのだという意識もあるように思われる。ヴェリズモの文学が主にイタリア南部の農民や漁民や鉱夫の姿を描くことが多かったのに対し、ラファネッリの短編作品は農民や漁民、鉱夫だけでなく、近代的都市に暮らす工場労働者やメイドの姿も描いている²⁹。また、ラファネッリの作品にはアナキストが数多く登場するという特徴もある。

上記の引用箇所のと、同じ序文の中でラファネッリは、エドモンド・デ・アミーチスの『軍隊素描短編 (Bozzetti militari)』³⁰に言及し、『社会素描短編』というタイトルはこの有名なデ・アミーチスの作品のタイトルを思い起こさせると述べている(6)。その上で、ラファネッリは、「社会の (sociale)」という形容詞をタイトルに選んだ理由について、この短編集は「著者である自身の考えを表現しているものだから」という理由を挙げ、ここで描かれている人物はみな「これまでに社会学しか取り上げてこなかったような人びと」なのであると述べている。

こうしたラファネッリの考えをふまえた上で次節では、20世紀初頭の社会を生きる人びとがこの短編集のなかでどのように表象されているのか、そして「感じられた印象」や「体験された感覚」、「苦しみや痛み」がどのように描かれているのかを、ジェンダーと階級に注目しながら見ていく。

²⁷ 本論文における『社会素描短編集』からの引用は全て1921年の版にもとづく。

原文: Il bozzetto sociale riflette in poche pagine d'impressioni sentite e di sensazioni vissute, i multiformi aspetti della vita moderna. Si muovono, e nella nebbia delle sere grigie di freddo e di gelo, e nelle fosche tenebre del bassofondo, e nelle voragini moderne che sono le officine, e anche sulle luminose spiagge del mare, esseri che il romanziere non vede, che lo storico non conosce, perché nessuna caratteristica li differenzia dalla folla nella quale si agitano. Vivono in case, in tuguri, nelle profondità delle miniere, nella fredda solitudine delle galere, nella quiete dei conventi, vittime tutti di strazi e di dolori, soggetti tutti alle convenzionalità delle leggi presenti, ribelli anche doloranti ed esasperati, uomini, donne, fanciulli, che potrebbero dirsi i naufraghi della vita, ai quali nessuno porgerà mai la gomina della salvezza.

²⁸ ラファネッリはヴェリズモの影響を受けているが、ヴェリズモの客観性を重視はしておらず、アナキズム思想を広めるための手段として写実的描写を用いていると Pakieser は述べている (Pakieser 49)。

²⁹ ただし、ヴェルガの作品にも『Per le vie』などミラノの街を舞台としているものがあるため、この点についてはより詳細な比較検討が必要と思われる。

³⁰ 『軍隊素描短編 (Bozzetti militari)』は、軍隊での生活を描いた短編作品群である。1867年に戦争省の雑誌『軍隊のイタリア (Italia militare)』に連載され人気を博し、その後1868年に『軍隊の生活—素描短編集 (La vita militare. Bozzetti)』というタイトルで単行本として出版された。

3-2. 下層階級の登場人物

下層階級の人物に関しては、男女に共通して、貧困や過酷な労働に苦しむ様子が描かれている。ただし、男性が主人公の物語には、仲間との連帯で困難を乗り越える物語や隷属状態から自らを解放する物語も複数あるのに対し、女性が主人公の物語の場合はそのような作品はほとんどないと言ってよい³¹。男女ともに若くして死を迎える人物の物語も多いが、男性の場合は労働中の事故死の話が多いのに対し、女性の場合は自死や病死が多い。

女性登場人物としては、工場労働者、お針子、お針子見習い、メイド、農民、失業者、娼婦などが出てくる。男性労働者たちの身体が（疲弊してはいても）強く逞しい身体として描かれることが多いのに対し、女性労働者たちの身体は、日々の過酷な労働と永続的な貧困生活のなかで衰弱した不健康な身体として描かれることが多い。例えば、「工場の娘 (La figlia della fabbrica)」と題された短編では、出産後に死亡した製糸工のエピソードがあり、「製糸工場の仕事で消耗させられた彼女の虚弱なからだは、この危機を乗り越えられなかった」³²(116)と語られる。

また、「禁止された読みもの II (Lecture proibite II)」と題された短編では、お針子たちの労働の状況が以下のように身体への負荷を強調する形で描かれている。

彼女たちは11時間以上働く。一番年上のお針子でも一日2リラももらえない。

必要なときは徹夜をしなければならない。絹の布の上に身をかがめ、野心的な婦人たちの高級な服の上に身をかがめ、休みなく針仕事をし、石油ランプの光で目は疲れ、かがんだ姿勢で肩は痛む。

だからみな、虚弱で青白く、血の気がない。³³(131)

この物語には、監督者が外に出かけた際に勝手に休憩をとり、恋愛談義を明るく楽しむお針子たちの姿も描かれており、上記の引用のような陰鬱なイメージだけでお針子が描かれているわけではないが、その楽しげな様子は、語り手によって皮肉な調子で描かれている。束の間の休憩中、あるお針子がラブレター（ある学生から受け取ったもの）を声に出して読んで聞かせ、同僚のお針子たちはそのラブレターを賞賛する。語り手は、「お針子たちの理想」の存在である「学生」からのラブレターのなかの「陳腐なフレーズ」や「アンソロジーから丸写しされた詩節」にお針子たちが感動していることに触れ、「彼女たちは、これからいくつの幻滅に出会うことだろう？ だが、彼女たちの労働と空腹の青春を照らすたった一筋の陽光を取り去ることは良いことだろうか？」と結んでいる(132)³⁴。

この短編集における下層階級女性の物語の特徴としては、疲弊・衰弱する身体の問題に加え、性的欲望の対象として眺められ利用される身体の問題や、望まぬ妊娠・出産の問題が描かれていることも挙げられる。なかでも特に目

³¹ 例えば「工場の娘 (La figlia della fabbrica)」では、出産後に死亡した未婚の女性工員の娘を同僚の女性たちが共同で育てるなど、女性同士の連帯の力が描かれているが、最終的にその娘は自死してしまうという絶望的な結末になっており、連帯で困難を乗り越える物語の型とは異なる。

³² 原文：il suo gracile organismo, logorato dall'esauriente lavoro della filanda non aveva superato la crisi

³³ 原文：lavorano oltre undici ore, e la più anziana non arriva a prendere due lire al giorno. / Quando il lavoro lo richiede, devono far nottata, lavorare curve sulle stoffe di seta, sulle ricche vesti delle signore ambiziose, agucchiando senza riposo, affaticando la vista alla luce di lumi a petrolio, con le spalle dolenti per lo stare piegate. / Quasi tutte perciò sono gracili, pallide, anemiche.

³⁴ 原文：A quante disillusioni vanno mai incontro! Ma sarebbe ben fatto togliere loro l'unico raggio di sole che illumina la loro gioventù di lavoro e di fame?

立つのは、上位の階級・立場の男性に誘惑され恋に落ちた女性が妊娠し、男性から関係を断たれた状態で出産するパターンの物語である。

「工場の娘 (La figlia della fabbrica)」「二人の女 (Due donne)」、「挨拶 (Il saluto)」の三作品は内容の詳細は異なるものの、全てこの型に当てはまる。「工場の娘」では雇い主に誘惑されて、妊娠・出産した女性工員が娘を出産後すぐに亡くなる。娘マリアは、(母の同僚だった)女性工員たちによって共同で育てられるが、成長後に、自分の恋人(工場長の息子)が実は弟であることを知り、自死する。「二人の女」では、勤め先の家の未婚の伯爵に誘惑され妊娠したメイドが娘を一人で育てるが結核にかかり病死する。娘のジョルジーナは経済的に困窮し娼婦になる。一方、伯爵は金のために裕福な未亡人と結婚し、二人の間に娘クララが生まれる。この作品では、貧しいジョルジーナと裕福なクララの世界が対比的に描かれている。「挨拶」は、勤め先の家の客に誘惑され妊娠したメイドが、家のなかで隠れて出産したあとに子どもの泣き声(「初めての挨拶」)を抑えようとして子どもを殺してしまうという筋書きの孤立出産と乳児殺害遺棄の物語である。どの作品においても、女性たちが悲劇的な結末を迎えるのに対して、父親である男性たちは罰せられたり不幸な目に遭うことはない。また、三作品とも客観的な視点あるいは女性登場人物の視点に立った三人称の語りとなっており、女性登場人物の内面は描かれているが、男性登場人物の内面描写や彼らの視点からの描写はほとんどない。

男性に誘惑され肉体関係を持ったのちに妊娠し関係を断たれるという筋書きはこの時代に

限らず、よくある物語の型であると言える。この短編集における特徴としては、三作品とも全て、上位の階級の男性に誘惑されているということが挙げられるだろう。同じ階級の男性に誘惑されて妊娠した女性が一方的に関係を断たれるという話はこの短編集には出てこない。

また、妊娠した女性の親族(親や兄弟など)が全く登場しないという特徴も挙げられる。特に「二人の女性」と「挨拶」の二作品からは、家族や友人との繋がりも同僚との繋がりもない女性の孤立の問題が浮かび上がる。「工場の娘」では、製糸工場の女性工員の協力関係や、彼女たちの子どもたちとマリアとの間の兄弟のような関係性が描かれている。それに対し、「二人の女性」や「挨拶」をはじめとする作品に登場する家事使用人(メイド)は、そうした職場の同僚との協力関係がなく、孤立している。

近現代イタリアの女性の労働について書かれた Pescarolo の研究書によれば、当時、家事使用人の仕事は、農村から都会に出てきた若い女性によって担われることが多かった(Pescarolo, ch. 6, sec. 3)³⁵。また、20世紀最初の数十年における家事使用人女性の状況は、「伝統的な視点」から見れば、以前よりも「悪化し、匿名的」なものになっていた(Pescarolo, ch. 6, sec. 3)。以前は、封建社会の論理に基づき、家事使用人たちが、(隷属的な立場としてではあるが)主人の家の一員として認められ、同じ家の他の使用人たちと共に一つの共同体に属していたのに対し、20世紀前半の都会の家事使用人は共同体に属さない孤立した匿名的存在になっていった。

孤立出産の物語である短編「挨拶」では、そうした大都会における不安定で孤立した家事

³⁵ Pescarolo (ch. 6, sec. 3)によると、19世紀から20世紀初頭にかけて、家事使用人の仕事がミラノなどの大都市で増えていくという傾向に加え、男性の家事使用人が減り、女性の家事使用人の割合が増えていくという傾向があった。背景としては、工業の発展や、他業種での男性の雇用機会の増加、民主主義思想の広がり指摘されている。民主主義思想の広がりや、「家事使用人のアイデンティティや役割」にも大きな変化をもたらした。封建的規範によって価値づけられ、「主人のステータス」とも結びついていた「制服を着た家事使用人の男性たち」の姿は消えていった。

使用人女性の姿が描かれている。「思春期の頃から使用人として働きつづける生活を送り、家から家へと渡り歩いてきたエルミニアは、今の仕事を失ってしまうかもしれないと考え、怯えていた」³⁶「生きるために使用人として働かざるを得ない彼女にとって、母親になることは、人生の破滅だった」³⁷(322)と主人公エルミニアの不安が語られる。主人公は、休暇中に隠れて出産し子どもを乳児院に入れる予定だったが、予定よりも早く産気づいてしまい、住み込みで働いている家の自らの部屋のなかで声を押し殺しながら一人で出産する。生まれた子どもの泣き声を抑えようとして子どもを窒息死させてしまい、密かに外出し子どもを街の城壁のそばに遺棄する。誰ひとり主人公の妊娠・出産・乳児遺棄に気づくことなく物語は終わる。この物語の冒頭には1ページ半に渡って、都会の街中を行き交うさまざまな職種・階級の人びとの姿を匿名的に描いている箇所があり、この部分は一見、物語と無関係だが、都会で家事使用人として生きる主人公の孤立を鮮明にする役割を果たしているようにも思われる。

この短編集のなかにはこうした妊娠・出産の物語だけではなく、女性に対する性的な眼差しや、性的ハラスメント、性的暴行を主題としている物語もある。

「お針子見習い(La “piscinina”)」では、娼館と思われる場所に娼婦たちの服を届けに行くお針子たちが、娼館の客である上流階級の男性たちから性的な誘いの言葉をかけられたり、無理やりキスされたりする。お針子たちの雇い

主や監督者は彼女たちの苦情を耳にするが、真剣に受け止めない。お針子たちが娼館に行くのを嫌がるため、年齢の低いお針子見習いの少女(piscinina)たちに服を届けさせるようになる。しかしお針子見習いたちもやはり行くのを嫌がるようになる。一人だけ、頭の回転が早く活発で気の強いマリウッチャという14歳の少女だけが、自分は男性たちをうまくかわせると信じて娼館に服を届ける役割を担いつづける。しかし、ある日マリウッチャは娼館で上流階級の男性にレイプされ、その後、運河に身を投げ自死する。この物語の舞台は「パリの街」と書かれているが、タイトルの「piscinina」という言葉はミラノの方言である。もともとは「小さな女の子」を意味する言葉であるが、20世紀初頭のミラノでは衣服や帽子を製作する工房で見習いとして働く6歳から15歳までの年齢の少女たちが「piscinina」と呼ばれていた(Palumbo, ch. 3)³⁸。

この短編ではお針子たちの姿が男性の性的な視線を通して以下のように描かれている。「全てを買うことに慣れた男たちの貪欲な目が、若い娘たちをじっと見つめていた。彼女たちは、とりわけ美しくもなく、エレガントでもなかったが、若く可憐で瑞々しい。唇は自然な赤色で、口紅はつけていない。髪は、黒髪あるいは金髪で、簡素にまとめられているが、柔らかく豊かである」³⁹(56)。節の冒頭で取り上げた作品「禁じられた読みものII」に登場するお針子たちの衰弱した不健康な身体イメージとはかなり異なる姿が「男性たちの目に映るお針子の姿」とし

³⁶ 原文：Erminia, ragazza passata di casa in casa, abituata a servire fino dalla sua adolescenza, tremava all'idea di perdere quel posto.

³⁷ 原文：Costretta a servire per vivere, l'essere madre era la rovina della sua vita.

³⁸ Palumboによると、piscininaたちは過酷な労働条件のもとで働いていた。1902年には、女性運動の組織である Unione femminile (女性連合)の助けを得ながら、14歳の少女の指揮のもとで、piscininaたちのストライキが行われた。少なくとも400人がストライキに参加したという。このストライキでは、「11～14時間の労働に対して25～30チェンテージモしか払われていなかった給料を少なくとも50チェンテージモに上げる」という要求がなされた(ch. 4)。

³⁹ 原文：sguardi cupidi di uomini abituati a comprare tutto, si fissavano su quelle fanciulle, non bellissime, non elegantissime, ma giovani, graziose, fresche; con le labbra rosse naturalmente senza belletto e i capelli o biondi o bruni annodati con semplicità, ma morbidi e ricchi.

て描かれている。その姿はさらに、以下のようにも描かれている。「非常に美しく華やかに着飾り化粧をした値段付きの女性ばかりがいるあの館において、あの娘たちは希少品だった。そして、全ての希少品が魅力的であるように、彼女たちは魅力的であった」⁴⁰ (56)。ここではお針子たちが、品定めするように眺められ、「値段のついていない希少品」として性欲と所有欲の対象となっている。

ここまで見てきたように、この短編集では女性労働者が上位階級の男性に都合よく利用され不幸になる話や、性的に消費・搾取される話が多く、「加害者のブルジョワ・貴族男性」対「被害者の女性労働者」という構図が繰り返し現れているが、短編集全体を見ると、そのような図式に収まらない作品もある。「社会の混沌」と題されたシリーズに属する「社会の混沌 VIII—親のわからない子(孤児院)」では、気管支炎や怪我で家事使用人としての仕事を失いホームレスになった女性が、謝肉祭期間の最終夜に田舎の工場の外の馬車の下で寝ている間にレイプされる。暗闇で加害者の男性の姿は見えず、どのような人物なのか全くわからない。寒空での野宿生活と空腹が続き抵抗する気力もないほど弱っている女性は、不快や苦痛を感じず、ただ酒の匂いと温かさだけを感じる。「社会の混沌 VI—女の問題(売春宿)」では、農村出身の女性工員が都会的で上品な雰囲気男性に騙され、売春を強いられる物語である。元工場集金人で犯罪者の男性に誘惑された女性工員は精神的にも経済的にも男性に支配されるが、その後、嫉妬に狂い、男性を騙し

て復讐を実行する。「社会の混沌 I—ワインと血(居酒屋)」では、アルコール中毒の夫に苦しむ妻の姿が描かれている。居酒屋に夫を探しに行った妻は、酒に酔った夫が誰かと喧嘩をしている姿を見る。妻の目に映る夫の姿は以下のように書かれている。「喧嘩をしているその男は、もはや彼女の夫ではなく、彼女の愛した男ではなかった。それは彼女が憎み呪っている野獣であった。彼女のわずかな稼ぎを使い果たし、居酒屋で飲むために子どもたちの口からパンを奪い、土曜の深酒を支払うために週に2、3日だけ働く野獣であった」⁴¹ (168)。夫が喧嘩で死亡したのち、妻は以下のように解放の感覚を抱く。「彼は帰ってこないだろう……彼女は自分の意に反して、解放の感覚を抱いていた。彼女が愛した人間は、酒に溺れはじめたときから彼女にとっては人間でなくなっていた」⁴² (169)。

ここまで見てきた例のように、この短編集において下層階級の女性はたいてい同情的・共感的に描かれているが、そうではない作品もある。「ブルジョワの優しさ(Gentilezza borghese)」では、家事使用人の女性の過剰なほどに隷属的なふるまいが批判的に描かれている。通行止めの鎖がかかっている道に向かって車で走りはじめた雇い主のために、全速力で裸足のまま駆けつけ鎖を外す女性について、一人称の語り手が「その卑屈なへつらいに、私は同情よりも苛立ちを感じた。車には速く走らせておけば良いのに！ そうすれば車は鎖の前で止まらざるをえないのだから、ゆっくり歩いても追いつくことができたはずだ」⁴³ (103)と

⁴⁰ 原文: Ed erano una rarità quelle fanciulle, là in quella casa dove erano donne bellissime, vestite sfarzosamente, pitturate nella faccia e segnate di un prezzo; e come tutte le rarità erano attraenti.

⁴¹ 原文: Quell'uomo che si dibatteva nella rissa non era più il suo marito, l'uomo che aveva amato. Era il brutto che odiava, che malediva, che le finiva il misero guadagno del suo lavoro, che levava il pane di bocca ai bambini per beverselo all'osteria, che lavorava solo due o tre giorni la settimana, per potersi pagare al sabato sera una sbornia...

⁴² 原文: Lui non sarebbe tornato... E, involontariamente, sentiva un senso di liberazione... Sentiva che quell'uomo che aveva amato, da quando si era dato al bere aveva cessato per lei di essere un uomo.

⁴³ 原文: Quella vile servilità mi fece più ira che compassione. Oh! lasciasse pure correre l'automobile veloce! Lo avrebbe raggiunto poi, a comodo, mentre per forza l'avrebbe attesa, impedito nella corsa dalla catena...

述べる。女性がそのようなふるまいをすることの背景の事情は全く語られず、「誰かに仕えるしか価値のない人もいるのだと私は思った」⁴⁴ (103)と結ばれている。

この短編集の女性の表象に見られるもう一つの特徴としては、政治的な女性や権力に反抗しようとする女性が登場しないことが挙げられる。ラファネッリ自身は、アナキストとして活動していた政治的で反体制的な女性であったが、この短編集にはそのような女性は登場しない。また、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期には女性労働者たちのストライキも多く起こっていたが⁴⁵、この短編集にはそうした女性労働者のストライキや抗議行動は描かれていない。「光の兆し (Barlume di luce)」と題された作品では、失業中の植字工の男性と出会い彼の意見を聞いた農民の男女兄弟が、不平等な搾取の問題を意識しはじめる。「反抗の初めての身震いが、夜の空気とともに、貧しい家に入ってきた」⁴⁶ (37)と作品は結ばれており、この農民の男女兄弟に反抗の意識が芽生えたことが示唆されているが、物語はそこで終わっており、その後の変化は描かれていない。

「会話 (Conversazione)」と題された作品においては、表層的な会話を繰り返す男女が批判的に描かれている。この作品は、夜に丘の上で語り合う男女グループ (6人の男性と3人の女性) の物語である。まず男性たちが階級闘争についての「陳腐ではなく興味深い」 (147) 政治談義で盛り上がるが、退屈した女性たち (3人の男性たちの姉妹) の様子を見て、何人かの

男性が政治談義をやめ、女性たちと表層的でありきたりな会話をしはじめる。沈黙を埋めるためだけに繰り返される退屈で表層的な会話に参加せず黙っている男性に対して、一人の女性が「なぜ黙っているのか」と問うと、男性は次のように述べる。

君たちに同情している。と同時に、君たちの空っぽの小さな頭、君たちの綺麗に整えられた巻き毛の下の痛々しいほどに空っぽの頭を所有して満足している君たちの仲間や恋人たちが不思議でならない。君たちの心は強い感覚を味わうことができない。その責任は、ここにいる仲間の男性たちの「騎士道的なふるまい」にあると思う。盛り上がっていた会話で君たちが退屈しないようにするという「騎士道的ふるまい」だ。(中略) 君たちは天気や、山の美しさ、ここの静けさの荘厳な平和について一時間ほど話した、いや、おしゃべりした。だけれど、夜には山が見えないことや、君たちの陳腐なおしゃべりの声が静けさと平和を遮っていること、地平線の遠く向こうのほうでは雨雲が濃くなってきていることには気がついていない……。それは、君たちの男たちのせいでもあると思う。君たちの男たちは、恋人も兄弟も、君たちを自分のそばにおいておくことで満足している。彼らは君たちのことを、伴侶として、人形として、女性ではなく雌として、自分のそばにおいておければ満足なんだ。⁴⁷ (150)

⁴⁴ 原文: Ed io pensai che certa gente non merita altro che di servire.

⁴⁵ この時代の女性労働者のストライキについては、Pescarolo (ch. 5, sec. 2) を参照。

⁴⁶ 原文: Coll'aria della notte il primo fremito di ribellione entrava nella povera casa.

⁴⁷ 原文: Io vi compiango, e nello stesso tempo penso come fanno, i vostri compagni, i vostri innamorati a sentirsi soddisfatti a possedere le vostre belle testoline vuote, così desolatamente vuote sotto i ricci bene accomodati: le vostre anime sono incapaci di sentire le sensazioni forti... E dico ai miei compagni che io stimo colpevole la loro *cavalleria*, desiosa di non farvi annoiare con la nostra conversazione che ci aveva animato e ci interessava... Per un'ora avete parlato, chiacchierato anzi, del tempo, della bellezza del monte, della pace solenne di questa solitudine, senza osservare che il monte nella sera non si vede più, che il vostro cicalaggio banale interrompe il silenzio e la pace e che là in fondo, lontano lontano nell'orizzonte, le nuvole della pioggia si addensano... E penso che è colpa anche dei vostri uomini, sieno amanti o fratelli, che si contentano di avere al fianco, compagne della loro vita, delle bambole,

ここでは、政治談義に全く関心を持たず表層的な会話を繰り返す女性たちが批判されているが、批判の矛先は男性たちの「騎士道的ふるまい」にも向けられている。一見、女性に対する敬意や親切であるかのようにも見える「騎士道的ふるまい」に孕まれている女性蔑視が批判されている。女性たちが表層的な会話を繰り返していたのは、女性が本質的にそのような特性を持つからではなく、周囲の男性たちのふるまいや考え方に原因があるのだと指摘されている。こうした部分には、「女性とは政治的な会話や深い会話はできないし、そのような会話をする必要もない」という男性側の女性蔑視的な思い込みに対する批判意識が読み取れる。こうした批判は、物語の男性登場人物の意見として書かれているものであって著者の意見として書かれているわけではないが、ラファネッリ自身の考えを反映させたものと見ることも可能だろう。ただし、この短編集は、そうした批判意識にもとづきステレオタイプのでない新たな女性像を提示しているわけではない。この短編集の女性表象はむしろ、「政治に無関心な女性」、「反抗しない女性」、「男性に教諭される女性」といったジェンダーステレオタイプをなぞっている側面もある。

こうした女性登場人物の姿とは対照的に、この短編集の下層階級の男性登場人物には政治意識を強く持つ反体制的な人物が多い。男性登場人物のなかにも政治意識を持たない人物や権力に追従する人物が存在するが、同じ作品のなかで政治意識の強い反体制的な人物と共に登場することが多い。ストライキを行う人物として登場するのも男性ばかりである。

この短編集のなかの男性労働者の物語のもう一つの特徴としては、労働中の死が多く語られることも挙げられる。「二つの葬式 (Due funerali)」では印刷工場で機械に巻き込まれて死亡する男性、「真珠のネックレス (Il vezzo di perle)」では真珠採取の作中に海で死亡する男性、「海の声 (La voce del mare)」では嵐で息子を亡くした漁師、「英雄 II (Eroi II)」では、火事の現場で救命活動中に死亡する消防士の男性が登場する。

それに加え、男性登場人物の物語に多く見られるのは、刑務所や兵舎などで自由を奪われ、管理・規律される苦しみのお話である。特に、若者たちが強制的な兵役で直面する軍隊生活の不条理や苦しみを描いた作品が多い⁴⁸。これらの作品には、軍国主義にも戦争にも軍隊制度やナショナリズムにも反対の立場であったラファネッリの思想が色濃く反映されている。「新しい芽 (Nuovo germe)」と題された作品では、兵役をはじめ若者たちの陰鬱な心境が、以下のように圧迫感や拘束感を強調するような表現で語られている「彼らの頭のなかに、兵舎がすべてを押しつぶす巨大な建造物のように立っていた——それは、病院の廊下がついた刑務所だ！ それに規律は耐え難いくびきのように彼らにのしかかるだろう」⁴⁹ (52)。

「ストライキのあと (Dopo lo sciopero)」と題された作品では、農民のストライキを破るために派遣された兵士たちの陰鬱な心境が次のように描かれている。

兵士たちは、麦の向こうの遠くにいる男たちを見つめていた。その眼差しは、尊大な眼差しであろうとしていたが、実際には

delle femmine e non delle donne.

⁴⁸ Le bolgie della società IV: Il “permesso” del maggiore, Ombre e luci II. Bandiere (Il mare), Dopo lo sciopero, Grosse manovre などの作品が挙げられる。

⁴⁹ 原文: La caserma sorgeva al loro pensiero come una mole schiacciante, - una prigione con entro corsie da ospedale! E per di più la disciplina avrebbe gravato sopra di loro come un giogo insopportabile...

良心の呵責の恐れがこもった眼差しだった。兵士たちは心の奥では、自分たちの階級、苦難の兄弟を裏切ったことをわかっていた。⁵⁰ (312)

ストライキ破りは成功し、兵士たちは褒美に農場の主人たちからワインを振る舞われる。罪悪感を忘れようとワインを飲んだ兵士たちの心境は以下のように描かれている。「兵士たちは、良心の呵責を紛らわせるために大酒を浴びた。翌朝、彼らの頭は重く、口は苦かった」⁵¹ (312)

「大演習 (Grosse manovre)」と題された作品では、強い日差しのなか訓練のために何時間も列になって歩かされる兵士たちが主人公である。身体が弱い兵士ジルドが今にも倒れそうになっているのを見た友人のピエロは、「具合が悪いと言って列を離れて木陰で休むべきだ」と助言する。しかしジルドは、命令に逆らうことを嫌い、頑なに歩き続ける。ピエロは、頑なな友人のために具合が悪いふりをして、木陰で休もうとする。何人かの兵士たちがそれに続いて列を離れて木陰に移動するが、ジルドは無理して頑なに歩き続ける。その結果、ジルドは熱中症で死亡してしまう。

この物語では「仕える・役立つ」という意味を持つ *servire* という動詞が繰り返し登場する。まずピエロはジルドに対し、次のように語って休ませようとする。「君は今日の犠牲で何かの役に立っている、国のためにきちんと役立っているのだと信じているんだろう。幻想は捨

てる……今日の俺たちはお偉い奴の意向で引き連れ回される惨めな存在でしかないんだ」⁵² (329)。その後、休憩を希望するピエロに対し、それを認めようとしぬ隊長は、「黙れ！ 国が気の毒だ……そんなに弱くては国のために役立たない……」⁵³ (331)と叱る。それに対し、ピエロは、「国のために役立たなくとも、全く構わない」⁵⁴ (331)と言り返す。ピエロは後から罰を受けることを覚悟の上で頑なに列に戻らず、結局、隊長は休憩する者たちを置いて先に進むことになる。この物語では、軍隊生活のなかで愛国主義や絶対的服従のイデオロギーに洗脳されたジルドと、反抗しつづけるピエロとが対照的に描かれ、人間の自由と命を奪う軍隊の不条理が強調されている。

3-3. 上流階級の登場人物

この短編集は下層階級の人びとの物語を中心に語っているが、登場人物のなかには下層階級には属さない人物もいる。彼らのなかには、工場経営者や仕立て屋の経営者など中流階級に属すと思われる者もいるが、爵位を持つ貴族階級の登場人物の方が多い。こうした貴族階級の人物たちについて「貴族の (aristocratico)」という形容詞が使われている箇所もあるが、「ブルジョワの (borghese)」という形容詞の方がより頻繁に使われている。この短編集のなかでは、資本主義社会の人間を「プロレタリア」と「ブルジョワ」に二分する思想を前提に、爵位を持つ貴族たちも「ブルジョ

⁵⁰ 原文: I soldati guardavano da lontano gli uomini sperduti tra il grano, con uno sguardo che voleva essere altezzoso, ma che aveva in sé il timore del rimorso. I soldati avevano, in fondo ai cuori, la coscienza di aver tradito la loro classe, i fratelli di fatica...

⁵¹ 原文: Avevano bevuto senza misura, per affogare il rimorso e alla mattina aveva tutti la testa pesante e la bocca amara.

⁵² 原文において斜体で強調されている箇所に日本語訳では傍点を付した。

原文: Forse tu credi, col sacrificio odierno, di essere utile a qualche cosa, di *servire* doverosamente la patria. Disilluditi... Noi oggi non siamo che dei poveri esseri che una volontà superiore trascina.

⁵³ 原文: Silenzio! Povera patria... Volete servire la vostra patria con questa fiacca...

⁵⁴ 原文において斜体で強調されている箇所に日本語訳では傍点を付した。

原文: Il non *servirla* mi è indifferente...

ワ』として捉えられている⁵⁵。また爵位を持つ貴族の他には、勲位を持つ富豪も登場する。こうした上流階級の登場人物はたいいてい男女ともに下層階級の人びとの状況について無知・無関心であり、自らの加害性や搾取にも無自覚であり、下層階級の人間を蔑視している⁵⁶。

この短編集における上流階級男性の描かれ方と上流階級女性の描かれ方の間には共通性もあるが、対照的な側面もある。上流階級男性を主人公にした作品はほぼ存在しない⁵⁷のに対し、上流階級女性を主人公にした作品は複数ある。上流階級男性たちは脇役でしかなく、(彼らの台詞を除けば)彼らの視点から見た世界や彼らの感情が語られることがほとんどない。一方、ときおり主役として登場する上流階級の女性については、彼女たちの視点から見た世界や彼女たちの感情が多く言葉で語られている。とりわけ、彼女たちの自己顕示欲や虚栄心、孤独感、不満、苛立ちや悲しみなどが中心的に描かれている。また、彼女たちの物語には、下層階級女性の表象においても繰り返し現れる売春のモチーフがたびたび登場する。

「真珠のネックレス (Il vezzo di perle)」は、主人公の貴族女性が、非常に高価な真珠のネックレスをつけて劇場のバルコニーに座っている場面から始まり、女性のネックレスは年老いた伯爵との肉体関係と引き換えにもらったものだと言明される。

彼女はいま何気ない様子でネックレスを

つけている。しかし、そのネックレス、その宝石のために、傲慢な彼女は娼婦のように自らを売ったのだ。彼女の夫は、金持ちだったが、自分が愛していない女性の我儘のために大金を叩いてあのような真珠を買うことなど決してできなかつただろう。(39-40)⁵⁸

彼女の結婚生活は、この短編集に登場する他の貴族女性の結婚生活と同様、愛のないものとして描かれている。下層階級の女性登場人物が日々の食糧のために身を売るのに対し、貴族女性の登場人物たちは高価なアクセサリーやドレスのために身を売る。両者は一見対照的ではあるが、何かを手に入れるために肉体関係を結ぶという点では共通している。この主人公がなぜそこまでして真珠のネックレスを欲しかったのかは直接的には語られていないが、作品内の描写からは、この女性が人びとの注目や称賛や欲望の対象となることを渴望していることが分かる。自分の胸とネックレスに視線が集まっていることを自覚する女性の心境は次のように語られている。

彼女は、その白い胸が全ての男性の称賛の対象であることを、そして真珠のネックレス(並外れて大きな真珠だった)が全ての女性の欲望の対象であることを知っていた。その両方を所有していること、そして、劇場の全てのオペラグラスが彼女に

⁵⁵ さらに付け加えて言えば、この時代のイタリアにおいては貴族とブルジョワとの融合が進んでいた。自由主義時代のイタリアにおけるブルジョワの歴史については、Bantiの研究書で詳しく論じられている。

⁵⁶ ただし、下層階級の人びとを蔑視していない登場人物も存在する。「母(ブルジョワの惨めさ) (Madre (Misericordia))」の主人公の公爵夫人が例として挙げられる。

⁵⁷ 兵舎内で密かに読まれている反体制的な小冊子を題材とした「禁じられた読みもの IV (Letture proibite IV)」は、軍隊の大尉を主人公としており前半ではこの大尉の視点に焦点が当てられているが、最後の方では、小冊子を密かに読む兵士たちの視点に焦点が当てられている。この大尉がもともとどのような社会階層に属す人間なのかは語られていない。

⁵⁸ 原文: Ella portava il vezzo con noncuranza, ora; benché, per quel vezzo, per quel gioiello, lei, la bella superba, si fosse venduta come una cortigiana: suo marito, benché ricco, non avrebbe mai potuto spendere una forte somma in quelle perle per il capriccio di una donna che non amava.

向けられているのを誇らしく思っていた。⁵⁹
(39)

彼女の胸と真珠のネックレスを見つめる劇場の観客は、ただ単に美しさに見惚れているわけではなく、実はみなこの真珠のネックレスがどのように得られたものかを知っており、だからこそ強い欲望の眼差しを注いでいるのだということが、このあと語り手によって読者に知らされる。「実際のところ、みなそのことを知っていた。おそらくだからこそ、物欲しげな目はより強く光り輝き、墮落した女性の白い胸と真珠に向けられた欲望はより鮮烈になっていたのだろう」⁶⁰ (40)。ここでは彼女の胸への男性たちの眼差しが「性の欲望」を体現し、真珠への女性たちの眼差しが「金の欲望」を体現している。女性の胸に「白い」という形容詞が付されており、白い胸と白い真珠のイメージが重ね合わされている。

舞台が始まり、劇場の観客が舞台上の女性に視線を注ぎ拍手喝采を送ると、真珠のネックレスの女性は、強い苛立ちと嫉妬を覚えるが、その感情を押し殺そうとする。「お気に入りの芸術家に敬意を払う観客の響きわたる拍手のなかで、彼女は怒りに震え、激しい喝采のなかで唇を噛んだ。そして、最も上品な若者たちがボックス席から身を乗り出して花を投げているあいだ、細い指で真珠を潰れそうなくらい握りしめた」⁶¹ (40)。「婦人は、抑圧された怒りと嫉妬の感情で身震いを感じた」⁶² (40-41)。こうした嫉妬と怒りの描写からも、女性が注目や称賛を渴望していることが伝わってくる。この女

性がなぜこれまでに注目や称賛を欲しているのかという背景は説明されていないが、この女性が日々の生活のなかで精神的に満たされていないことは分かる。

なお、この作品は、前半では真珠のネックレスを身につけた貴族女性のエピソードを語っているが、後半ではこの真珠にまつわる異なるエピソードを、真珠採取の潜水夫の視点から語っている。インド洋で働くナポリ出身の潜水夫が母親に宛てた手紙の形で、同僚の「黒人」や「中国人」の労働中の失神や死についてのエピソードが語られ、作品の末尾ではこの手紙の書き手であるナポリ出身の潜水夫も海の中で死ぬ運命にあることが仄めかされる。このように、前半の貴族女性の白く輝く真珠と胸のエピソードと後半の潜水夫たちの過酷なエピソードのコントラストによって、植民地主義の歴史とも関わるグロテスクでグローバルな搾取の構造が浮かび上がる仕掛けとなっている。

高価な服飾品で注目や賞賛を浴びることにしか生きがいを見出せない貴族女性の姿や、称賛を浴びようとして空回りする貴族女性の姿は、「ある金曜日 (Un venerdì)」という作品にも再び登場する。毎週金曜日に、自らの家でパーティーを開いている主人公(リディアという名の男爵夫人)は、パーティーでどのような装いをするかということに最大の関心を注ぎ、ドレスを選ぶために何度も服を着替える。ある週の金曜日、ドレスを(元お針子の)メイドの女性に手直ししてもらうが、思い通りにいかず癩癩を起こした挙句、その日のパーティーを中止にする。その後、部屋のなかで一人窓の外を眺

⁵⁹ 原文: Ella sapeva che il suo bianco petto era oggetto d'ammirazione per tutti gli uomini e che il suo vezzo di perle, (perle di una grossezza inverosimile) era il desiderio di tutte le donne. Ed era superba di possedere entrambe le cose e di avere perciò, fissi sopra di lei tutti i binocoli del teatro.

⁶⁰ 原文: Il fatto era che tutti lo sapevano, e forse perciò gli sguardi cupidi erano più brillanti, il desiderio più vivo, per le belle perle e per quel bianco seno di donna corrotta.

⁶¹ 原文: Ed ella fremé di rabbia all'applauso scrosciante del pubblico che rendeva omaggio all'artista prediletta, e si morse le labbra nel delirio dell'evviva!, - e con le dita fini strinse le perle quasi volesse schiacciarle, mentre i più eleganti giovani si sporgevano dai palchetti per gettare fiori...

⁶² 原文 la signora sentì un brivido di freddo, per l'ira e l'invidia repressa.

めながら、「わたしほど不幸な女性がこの世にいるだろうか?」⁶³ (65, 66)と嘆く。

この作品のなかでパーティーに集う女性たちは以下のように描かれている。

意地悪な人びとの話によれば、この華麗な婦人たちは、ドレスのための巨額な借金を返すために、有力なカヴァリエーレ⁶⁴で富豪のファウステイーノの表敬(もちろん真面目なものだ!)を受け取っているらしい。ファウステイーノは、300人の工場労働者の空腹の上に富を蓄えた資本家で、自分の財産の一部を町の上流階級の美しい婦人たちのキスを買うために使って楽しんでいた。⁶⁵ (62)

前述の作品「真珠のネックレス」と同様、高価な装いによって注目と賞賛を浴びたいと願う貴族女性が自らの性を売るというエピソードが語られている。主人公の女性が同じことをしているかどうかについては触れられておらず、毎週パーティーを自宅で開くことから周囲の女性よりも裕福なのだと想像できるが、やはり彼女もやはり高価なドレスによって注目と賞賛を浴びることを生きがいとしている。主人公の男爵夫人は過去にドレス選びに失敗して友人たちに嘲笑されたこともあり、ドレス選びに関して神経質になっていることが物語の冒頭で語られる。

この作品も、物語世界外の語り手によって三人称で語られているが、上記の引用からも分か

るように、完全に客観的な語り方ではなく、男爵夫人や彼女のパーティーに集う人間に対する語り手の批判意識が感じられる皮肉のこもった表現がたびたび登場する。男爵夫人の普段の神経質な様子や癩癩は、主にリゼッタという名のメイドの視点に寄り添うような形で描かれている。メイド(リゼッタ)は、家族に仕送りをするために男爵夫人の癩癩に耐え忍んでいるが、心のなかでは男爵夫人(リディア)を嘲笑している。男爵夫人が癩癩を起こして自らの服を引きちぎってしまった場面は、次のように描かれている。

激怒の発作に駆られ、ピンクの爪でドレスを胸のところに押さえ、カ一杯、下の方にひっぱった。

薄い布は力に屈し、一気に引き裂かれてしまった。高価な素晴らしいドレスは、無益なものになってしまった。

その行為の後、後悔がやってきたが、すでに遅かった。

引き裂かれてしまった透きとおるようなドレス、爪で引き裂かれた薄い布は、忍耐力のない夫人を嘲笑しているようだった。

リディアが怒り狂ってまた服を脱いでいる間、リゼッタは笑いを押し殺していた。⁶⁶ (64-65) [下線は引用者による]

基本的にはメイドの視点と内面に寄り添う形で男爵夫人の癩癩が滑稽に描かれているが、「後悔がやってきたが、すでに遅かった」とい

⁶³ 原文: Ci può essere al mondo una donna più infelice di me?

⁶⁴ カヴァリエーレとは、カヴァリエーレ(騎士)勲章を授けられた人のことを指している。

⁶⁵ 原文: Molti maligni però, dicevano che quelle superbe signore, per pagare i grossi debiti con le sarte, accettavano nelle loro case gli ossequi, (onesti s'intende!) del grosso cavaliere Faustino, un milionario, capitalista arricchito sulla fame dei suoi trecento operai, lusingato di spendere una parte del suo patrimonio col comprare i baci delle belle signore dell'alta società cittadina.

⁶⁶ 原文: Con le unghie rosee attaccò la veste sul petto, dette una stratta, tirando giù, con forza, nel parossismo della collera... / Il velo sottile cedette, si lacerò per tutta la larghezza. La magnifica veste costosa era resa inservibile... / Compiuto l'atto venne il pentimento, ma tardi. La veste diafana, stracciata, il velo lacerato dalle unghie sembrava deridere la impaziente signora... Lisetta tratteneva a stento le risa, mentre Lidia furibonda, si spogliava per la seconda volta.

う箇所では、男爵夫人の視点に寄り添うように、彼女の心の動きが描かれている。

結局パーティーを中止することにした男爵夫人は一人きりになった部屋で泣く。その後の場面では、窓から見える貧しい人びとの姿が男爵夫人の視点から語られる。毎週金曜日にわずかな施しを与える近所の裕福な信心深い女性の家の前に数多くの貧しい人びとが並んでいる。男爵夫人の目に映る彼らの姿の描写には、身体的特徴を表す言葉のほか、服装に関する言葉が多く使われている。彼らの行列は「ぼろぼろの服を着ている乞食たちの行列」⁶⁷ (65)と表現されており、「惨めな服装」(66)「埃で白くなったぼろぼろの靴」(65)「泥だらけの靴」(66)「裸足」(65)など、服装が繰り返し言及されている。また、幼い少年たちについては「父親のように泥棒になる運命の子どもたち」(65)「未来の犯罪者」(66)、幼い少女たちについては「数年後には娼婦になるだろう」(66)と書かれており、男爵夫人の軽蔑と偏見を反映した描写になっている。

作品の末尾では、男爵夫人が視線を窓辺から(自らが先ほど引きちぎった)服に移し、「私より不幸な女性がこの世にいるだろうか？」(66)と自問する。男爵夫人は、貧しい人びとの苦しみに無関心・鈍感であり、空腹に苦しみぼろぼろの衣服を着た窓の外の人びとよりも自分が不幸であると信じて疑わない。この物語では、自己中心的で自己顕示欲が強く我儘で他者への思いやりがない貴族女性の姿、そして彼女の貧者に対する蔑視や無関心が批判的に描かれていると言える。と同時に、貴族女性の精神的な惨めさや苦しさ、虚しさの問題も描かれている。この女性は非常に裕福で経済的には恵ま

れているが、精神的には全く満たされておらず、美しい装いで称賛されたい気持ちは空回りしつづけ、友人からもメイドからも「引き裂かれた布」からさえも嘲笑されている。

「母(ブルジョワの惨めさ)(Madre (Misericordia borghesi))」と題された作品には、裕福な貴族女性(公爵夫人)の孤独感が描かれている。この物語では貴族女性が珍しく善良な人間として描かれている。もともと伯爵令嬢だった主人公の女性は過去に農民と恋に落ち妊娠・出産したが、父親が結婚を許さなかったため、農民と別れさせられ、子どもは取り上げられてしまった。その後、父親から貴族男性(公爵)との結婚を無理強いされ、不幸な結婚生活を送っている。夫との間に生まれた息子との関係も悪く、主人公の貴族女性は精神的に全く満たされていない孤独な生活を送っている。

自宅で開かれたパーティーの後にソファで眠る女性の姿は以下のように描かれている。「多くの無駄な言葉、多くのありきたりな褒め言葉で疲れきっており、一人になって腰掛けるやいなや眠りに落ちたのだ」⁶⁸ (73)。その後、娼婦を連れて帰ってきた息子と短い口論をしたあとの心境は、以下のように書かれている。「強い痛みで、涙が流れ出た。自分がたった一人であり、壮麗な屋敷のなかで捨てられている存在であるように感じた。彼女にとってこの屋敷は、とても冷たく、愛情の空っぽな屋敷だった!」⁶⁹ (76)。公爵夫人は夫と息子と共に大きな屋敷に住み、経済的には何不自由ない暮らしをしており、住み込みの家事使用人たちに世話をされ、自宅でパーティーを開いているが、強い孤独感や欠乏感を抱えている。作品の末尾には「金と宝石でできた公爵夫人の重い王

⁶⁷ 最初に *processione di cenciosi* という表現が使われており、次に *processione di straccioni* という表現が使われている。*cenciosi* と *straccioni* はどちらも、「ぼろぼろの服を着ている人、乞食」という意味がある。

⁶⁸ 原文: *stanca di tante parole inutili, di tanti complimenti convenzionali, appena rimasta sola, riposando, si era addormentata.*

⁶⁹ 原文: *E allora il pianto sgorgò con la forza del suo dolore. Le sembrò di essere sola, abbandonata, in quel superbo palazzo, così freddo per lei, così vuoto d'affetti!*

冠が大きくなって行って、雪崩のように落ちてきて、その重みに屈して、自分が押しつぶされるように感じた」⁷⁰(77)と書かれており、単なる物足りなさではない、圧迫され破壊されるような精神的苦痛の感覚が比喩表現で語られている。

この作品は、非常によく似た題名のもう一つの作品「母(プロレタリアの惨めさ) (Madre (Misericordia proletaria))」と対になっている。「母(プロレタリアの惨めさ)」は、鉄道の車両の間に挟まれるという事故で夫を亡くした貧しい女性が子どもを抱えて路頭に迷い、最終的には売春をする話である。短編集ではこの二作が対のように続けて並べられており、「ブルジョワの母」も「プロレタリアの母」もそれぞれ異なる「惨めさ」を抱えていることが表現されている。

「鍛冶屋 (Il fabbro)」と題された作品では珍しく、男性の肉体に対する女性の欲望が描かれている。主人公である貴族未亡人のリーナは、金庫の設置のために屋敷に来た鍛冶屋の男性リーベロの美しい身体や顔に惹かれ、性的なまなざしを注いでいる。鍛冶屋の男性は彼女に全く興味がなく、むしろ軽蔑している。鍛冶屋が自分に無関心であることによって、リーナの鍛冶屋への欲望は余計にかき立てられる。鍛冶屋の美しい身体を眺めるリーナの頭によぎる思いは以下のように描かれている。

「^{きん}金である尊大で貧しいヘラクレスの愛を買うことはできるだろうか」と美しい婦人は考えていた。

いや……どうだろう……彼女はその考えを打ち消した。自分のような女性が身を

任すべき相手ではない……買うなんてもってのほかだ!⁷¹(159)

ここでは、リーナの最初の思考(「金である……」)は直接話法で記述されており、それに続く一連の思考が自由間接話法で記述されている。この物語は三人称で語られているが、こうした思考の記述を通して、読者はリーナの心のなかに導かれる。

その後、リーナの欲望は、反抗的な労働者階級の男性を服従させたいという支配欲とも関係していることが分かる。鍛冶屋に愛されることをリーナが妄想する場面は以下のように描かれる。

絹のストッキングを履きながら、美しい婦人はその夢を何度も繰り返した……自分の前で跪かせる。裕福で権力があり醜いブルジョワを体現する自分の前に、反抗的な平民である彼が跪くのだ……なんという大勝利だろう!⁷²(161)

その後、リーナの取り巻きの裕福な男性たちと鍛冶屋の間で口論が起きる。^{きん}金を所有することの素晴らしさを語る男性に対して、その金の背後にある労働者たちの苦勞を全く無視していると鍛冶屋が指摘し、激しい口論が起こる。その後、リーナは鍛冶屋を一人で部屋に呼び、仲直りを試みるが、鍛冶屋に冷たく一笑されてしまう。傷ついたリーナの心境は次のように語られている。「冷たい軽蔑は罵り言葉よりも彼女を傷つけた。怒りで我を失い、自分の身を暴

⁷⁰ 原文: le parve che la corona di duchessa, ingrandita, pesante d'oro e di gemme, calasse su lei come una valanga, la curvasse, la schiacciasse...

⁷¹ 原文: - Con l'oro - pensava la bella signora. - sarebbe possibile comprare l'amore di quell'Ercole superbo e povero? / No... Chissà... Poi dubitava. Non doveva essere un uomo da farsi vincere... comprare poi!

⁷² 原文: Mettendosi le calze di seta la bella signora tornava ostinatamente al suo sogno... Piegarlo davanti a sé - a lei, che incarnava la borghesia con tutte le sue ricchezze, le sue prepotenze, le sue brutture, lui, il ribelle plebeo... quale trionfo!

力から守ろうとするかのように、服の中に身をうずめた」⁷³(164)。怒ったリーナは、鍛冶屋を罵り、「自分のドブに帰りなさい……泥棒や売春婦たちがいるところ、そこがあなたの場所」⁷⁴(164)と述べる。すると鍛冶屋は、リーナを平手打ちし、彼女は失神してしまう。

婦人が失神している間、若者は肩をすくめ、満足した様子で立ち去った……女性を叩いたのが卑劣だとは思わなかった……むしろ、自分の反抗的な行為は下層階級が別の階級に対して行う暴力的な要求なのだと感じた。⁷⁵(164)

この物語は全体的に貴族女性リーナの視点から見た世界や彼女の内面が中心的に語られているが、物語の中盤からは鍛冶屋の心の声も挟まれ、物語の最後の平手打ちの後には、鍛冶屋の心境のみが語られている。平手打ちを受けた後の女性の心境は一切語られることなく、物語は終わっている。

階級間の搾取について強い問題意識を持っている鍛冶屋は、美しい貴族未亡人に一度も魅力を感じることもなければ、彼女に支配されることもない。鍛冶屋の名前が「リーベロ」(「自由」を意味する形容詞)であることから分かるように、この鍛冶屋の男性は「自由」のために反抗する「プロレタリア階級」の象徴として描かれている。こうした部分には階級間の闘争を重視するラファネッリの思想が反映されていると言ってよいだろう。前節(3-2)で述べたように、『社会素描短編集』では、女性労働者が上位階級の男性に誘惑され恋に落ち、肉体関係を

結んだ後に関係を断たれるという筋書きの物語が多い。「鍛冶屋」の物語は、こうした女性労働者の物語とは対照的である。

一方、この短編集に登場する上流階級男性の登場人物の特徴としては、下層階級の女性を性的に利用する人物が多いということが挙げられる。上述のように、この短編集で、下層階級の男性に性的欲望を抱く唯一の女性登場人物は、誘惑に失敗し平手打ちをされる。それに対し、上流階級の男性登場人物たちは下層階級の女性の誘惑に成功する上、妊娠した女性を見捨てても何の罰も受けることない。

また、上流階級の男性たちは買春を通して女性を性的に搾取する存在としても繰り返し登場する。短編集の最後の作品「大物刈り(Caccia grossa)」では、少女を買春しようとしているカヴァリエーレ(騎士の勲位を持つ男性)を警官が目撃するが、地位の高い人物であるために警官たちは何も見なかったことにする。そのほか、前節で取り上げた「母親(ブルジョワの惨めさ)」には息子が娼婦を家に連れて帰ってくる場面があり、母親の目に映る息子の姿が「二十歳の若さですでに墮落していて、その活力と若さを俗悪な愛、金で買うキスに無駄遣いしている」⁷⁶(75)と描写されている。上記の引用に登場する「墮落している(dissoluto)」という形容詞は、この短編集において上流階級の男性に対して頻繁に使われている形容詞である。前の項で取り上げた「お針子見習い」においても上流階級の男性たちが次のように描写されている。「あらゆる愛撫を受け入れる唇に疲れて逃げ去ると、あの墮落した男性たちは、反抗的な唇に無理やりキスをしたいという野蛮な欲望に憑かれ

⁷³ 原文：Il disprezzo freddo la ferì più che un insulto. Cieca di collera ella si avvolse nella veste, quasi a proteggere il suo corpo da una violenza...

⁷⁴ 原文：Tornate nel vostro rigagnolo... Tra i ladri e le prostitute è il vostro posto.

⁷⁵ 原文：Poi, mentre la signora cadeva in deliquio, il giovane alzò le spalle e se ne andò soddisfatto... Non si disse che era una virtù l'aver battuto una donna... Ma sentì che il suo atto ribelle era il simbolo di una rivendicazione violenta che la classe plebea prendeva sull'altra...

⁷⁶ 原文：il giovane, già dissoluto a venti anni, sprecava la sua forza, la sua giovinezza in amori volgari, in baci pagati...

るのだった」⁷⁷ (56)。ただし、「二人の女性」や「女の問題」のように、下層階級男性の通う売春宿を描いている作品もあり、上流階級の男性の買春だけが批判的に描かれているわけではないということも付け加えておく必要があるだろう。

短編集のなかには上流階級の男性の女性に対する騎士道的なふるまいを批判した作品もある。前節でも取り上げた作品「ブルジョワの優しさ」では、上流階級の女性を上流階級の男性がエスコートする姿が次のように皮肉な調子で揶揄されている。

彼はすぐにドアを開け、彼女が通るときにはお辞儀をし、床を見つめる。まるで、彼女の通り道にあるかもしれない障害を全て取り除いておこうとでもしているかのよう。 (中略)

ブルジョワ男性たちは、弱い性に対してなんと優しいのだろう!⁷⁸ (101-102)

さらにこの後、一人称の語り手は、この男性を別のところで以前に見かけたことがあると語り始める。この男性は邸宅から道に向かって車を走らせていたが、道への入り口は鎖で封鎖されていた。男性が止まらずに道に出られるようにと、家事使用人の中年女性が裸足のまま全速力で駆けつけてきて鎖を外す。上流階級の女性を懇懇にエスコートしていた男性が、この使用人の女性には全く異なる態度をとっていることが次のように批判的に描かれている。「弱い性に対して大変優しい紳士は、彼女に感謝しない。それどころか、彼女を見もしない」⁷⁹ (103)。二人の女性に対する正反対の態度の

コントラストによって、前述の騎士道的ふるまいに見られる「ブルジョワ男性の優しさ」の欺瞞が揶揄されている。

この節の冒頭で言及したように、『社会素描短編』においては、上流階級の女性の目から見た世界や彼女たちの内面が描写されることがあるのに対し、上流階級の男性の目から見た世界や彼らの内面が描写されることはほとんどない。前述の「お針子見習い」の引用箇所のように、男性の内面の欲望が描写されることが稀に見られるくらいである。孤独感や虚しさなど、上流階級の女性たちの精神的な苦しさが、(批判的な形ではあるが)描かれていたのに対し、上流階級の男性たちの精神的な苦しさが描かれることはほとんどない。

短編集のなかで上流階級出身の男性登場人物の精神的な苦しみを主題にしている作品がひとつだけある。それは、「生者の墓 II—偽の平和 (修道院) (Le tombe dei vivi II (Il convento))」と題される作品で、修道士を主人公としている。主人公グスターヴォは、「信心深く厳格で裕福な家庭」(220)で幼年期を過ごし、11歳の時に修道院附属の寄宿学校に入れられた。寄宿学校での生活のなかで、修道士イシドーロと親しくなり、その後、イシドーロから性暴力を受けることになる。最初はその出来事の意味もよく理解できずにただ衝撃を受けていた少年は、成長してその出来事の意味を理解し、トラウマを抱えながら生きる。物語は三人称で語られているが、その視点は被害者グスターヴォの内面に寄り添ったものであり、過去の出来事は、グスターヴォの回想のような形で語られている。例えば自分がされたことの意味を理解した際の心境は、次のように語られ

⁷⁷ 原文: E quei dissoluti erano presi da un desiderio brutale di baciare a forza un paio di labbra ribelli, dopo essere fuggiti stanchi da altre labbra che si offrivano a tutte le carezze.

⁷⁸ 原文において斜体で強調されている箇所に日本語訳では傍点を付した。

原文: Ma egli fu pronto ad aprire la porta, a inchinarsi nel mentre passava, a guardare in terra quasi avesse voluto sbarazzare di ogni eventuale ostacolo il suo passaggio [...] / Quanto sono gentili i borghesi verso il sesso *debole*!

⁷⁹ 原文: Il signore, tanto gentile col sesso *debole* non si degnò di ringraziarla, anzi, nemmeno di guardarla...

ている。「彼はそのとき全てを理解した。自分が犠牲になった暴力の恐ろしさをそのとき理解した。内面が崩壊するかのようだった。突然すべてが壊れた。恥ずかしさによって、沈黙させられた」⁸⁰ (223-224)。また、成人し修道士として暮らす現在もトラウマに苦しむグスターヴォの心境は、以下のように描かれている。「彼も平和を探し、忘却を探した……しかし、見つけることができなかった。彼の魂にはまだ激しい嵐があり、穏やかな祈りの声も、諦めの声もその嵐を鎮めることはできなかった。遠くはない過去の記憶が苦痛とともに繰り返し彼を襲ってくるのだった」⁸¹ (220)。教会関係者による児童性虐待の問題に光を当て、沈黙や隠蔽のメカニズムにも触れながら被害者の深刻な心の傷を描写しているという点においてこの短編作品は先駆的であり、文学による貴重な告発であると言えるだろう。

おわりに

ここまで見てきたように、『社会素描短編』のなかにはさまざまな人間の「痛みと苦しみ」が描かれている。主人公の多くは下層階級の人間であるが、上流階級の人間も多く登場する。また、上流階級の人間を主人公とする作品も複数存在する。下層階級の人間に対しては「プロレタリアの (proletario)」という形容詞が使われ、貴族を中心とする上流階級の人間に対しては(「貴族の」という形容詞よりも)「ブルジョワの (borghese)」という形容詞が頻繁に使われている。一方、中流階級に属すると思われる主要登場人物は非常に少ない。その背景としては、「プロレタリア階級」と「ブルジョワ階級」との間の大きな貧富の差や不平等を劇的に描き

たいという狙いがあった可能性が考えられるだろう。

下層階級の女性と男性の表象を比べると、貧困や過酷な労働に苦しむ人物が多いという点などでは共通しているが、相違点もいくつかある。男性登場人物の場合は、労働中の事故によって死亡する者や、軍隊で自由を奪われ苦しむ者が多い。一方、女性登場人物の場合は、過酷な労働と貧困によって衰弱(あるいは病死)する者や、性欲の対象として眺められ利用される者、望まない妊娠をする者などが多い。これは、実際に当時の社会で多くの人びとが直面していた問題の男女間の差異を反映しているとも考えられるだろう。ラファネッリは、男女間の不平等の問題よりも階級間の不平等の問題をより強く意識しており、この短編集でも階級間の不平等を中心に描いているが、男性と女性の置かれている状況の差異への意識も見られる。また、男女間の不平等の問題を直接的に描いてはいないが、「騎士道的ふるまい」を描写している箇所では、女性蔑視に対する批判意識も読み取れる。

下層階級の男性と女性の表象のもう一つの差異としては、権力と闘う反体制的な男性登場人物が多いのに対し、女性登場人物にはそのような者がいないということも挙げられる。この点は、当時の反体制運動に関わる者に男性が多かったということを反映している可能性があるが、当時のイタリアで女性のストライキも行われていたことを考えると、それだけでは説明が不十分であるようにも思われる。この点については、今後、ラファネッリの他の作品とも比較しながら分析・検討していく必要があるだろう。

上流階級の女性と男性の表象を比較すると、

⁸⁰ 原文: Allora comprese tutto: allora capì in tutta la sua orrendezza la violenza della quale era stato vittima. / Fu un crollo intimo, una rovina improvvisa: la vergogna lo consigliò al silenzio

⁸¹ 原文: Aveva cercato la pace, anche lui, l'oblio... Ma non l'aveva trovato. / Nella sua anima era ancora la tempesta ruggente, e nessuna voce blanda di preghiera e di rassegnazione la poteva calmare. / Il ricordo del non lontano passato lo assaliva continuamente come uno spasimo.

どちらも下層階級の人びとに対して無知・無関心であり、彼らを搾取しつづける自己中心的で我儘な人物が多く、語り手によって批判的に描かれているという点においては共通している。ただし、男性登場人物が脇役としてしか登場せず、彼らの視点や内面が語られることがほとんどないのに対し、貴族女性は主役として登場することが多く、彼女たちの視点や内面が描かれているという大きな違いもある。貴族女性に関しては、ややステレオタイプ的ではあるが、彼女たちの抱える虚しさや孤独感、精神的な惨めさがさまざまなエピソードを通して語られている。ラファネッリはこの短編集で、上流階級の女性たちを抑圧者の側の人間として厳しく批判的に描きながらも、(上流階級の男性と比較したときの)彼女たちの立場の弱さや彼女たちの生き辛さにも目を向けているように思われる。

【参考文献】

- Banti, Alberto Mario. *Storia della borghesia italiana: l'età liberale*. Donzelli, 1996.
- Boccolari, Giorgio, and Fiamma Chessa, editors. *Storie di anarchici e anarchia. L'archivio Famiglia Berneri-Aurelio Chessa*. Biblioteca Panizzi, 2000.
- Boero, Silvia. "L'Oasi di Leda Rafanelli: la riscoperta di una narrazione fuori dagli schemi di genere." *L'originalità della ricerca storica: dieci anni di studi dell'Associazione di storia contemporanea*, edited by Marco Severini, Aras Edizioni, 2021, pp. 145–154.
- . "Memorie di una chiromante di Leda Rafanelli: autobiografia e politica militante." *Zb. rad. Filoz. fak. Splitu*, no. 10, 2017, pp. 3–13.
- Bonsaver, Guido. *Mussolini censore: storie di letteratura, dissenso e ipocrisia*. E-book ed., Laterza, 2015.
- Cappellini, Milva Maria. "Istintivamente verso Est." *I due doni e altre novelle orientali*, by Leda Rafanelli, Nerosubianco, 2014, pp. 137–159.
- . "La mia stanza orientale': la lunga vita inquieta di Leda Rafanelli." *L'Oasi. Romanzo arabo* by Leda Rafanelli, Corsiero editore, 2017, pp. 5–18.
- . "La sapiente arte di una donna." *Incantamento*, Corsiero editore, 2022, pp. 241–265.
- Chessa, Fiamma. "Introduzione – Premessa." *Leda Rafanelli – Carlo Carrà: un romanzo. Arte e politica in un incontro ormai celebre* by Leda Rafanelli, edited by Alberto Ciampi, Centro Internazionale della Grafica, 2005, pp. 17–22.
- Chessa, Fiamma, editor. *Leda Rafanelli tra letteratura e anarchia*. Biblioteca Panizzi, 2008.
- Ciampi, Alberto. *Futuristi e Anarchici. Quali rapporti?: dal primo manifesto alla prima guerra mondiale e dintorni (1909–1917)*. Archivio Famiglia Berneri, 1989.
- . "Leda Bruna Rafanelli – romanzi di vita." *Leda Rafanelli – Carlo Carrà: un romanzo. Arte e politica in un incontro ormai celebre* by Leda Rafanelli, edited by Alberto Ciampi, Centro Internazionale della Grafica, 2005, pp. 27–46.
- D'Aniello, Antonietta. "Le scritture della politica: storia e finzione nell'opera di Leda Rafanelli (1880–1971)." *Critica letteraria*, no. 104, 1999, pp. 567–598.
- de Grazia, Victoria. *How Fascism Ruled Women: Italy, 1922–1945*. E-book ed., University of California Press, 1992.
- Ferri, Enrico. "Leda Rafanelli: un anarchismo islamico?." *Tigor*, no. 2, 2012, pp. 69–88.
- Fonda, Edda. *Posso sempre pensare: quando le italiane non votavano. Storia di Leda Rafanelli*. Edda Lucia Caterina Fonda, 2014.
- Granata, Mattia. "Rafanelli, Leda." *Dizionario biografico degli anarchici italiani*, edited by Maurizio Antonioli et al., BFS, 2004, pp. 400–402

- Guidoni, Christiane. “Leda Rafanelli: ‘donna e femmina.’” *Chroniques italinennes*, no. 39–40, 1994, pp. 63–73.
- Marchese, Dora. “Anticolonialismo, anticapitalismo e questione femminile Leda Rafanelli, un’anarchica dal cuore zingaro.” *Revista Internacional de Culturas y Literaturas*, julio 2019, pp.170–178.
- Masini, Pier Carlo. “Introduzione.” *Una donna e mussolini* by Leda Rafanelli, Rizzoli, 1975, pp. 7–22.
- Pakieser, Andrea. *I Belong Only to Myself: The Life and Writings of Leda Rafanelli*. AK Press, 2014.
- Palumbo, Valeria. *Non per me sola: storia delle italiane attraverso i romanzi*. E-book ed., Laterza, 2020.
- Pescarolo, Alessandra. *Il lavoro delle donne nell’Italia contemporanea*. E-book ed., Viella, 2019.
- Pierotti, Alessandra. “‘Ricordo, rivivo, scelgo’: il progetto autobiografico di Leda Rafanelli.” *Storia e problemi contemporanei*, no. 49, settembre 2008, pp. 72–86.
- Pironi, Tiziana. “Leda Rafanelli: il viaggio come percorso di autoformazione.” *Biografia e formazione. Il vissuto delle donne*, Simplicissimus Book Farm, 2012, pp. 49–62.
- . “Leda Rafanelli. Una scrittrice per l’infanzia ‘inassimilabile’ al regime.” *Tessere trame, narrare storie. Le donne e la scrittura per l’infanzia*, Aracne, 2013, pp. 101–122.
- Rafanelli, Leda. *Bozzetti sociali*. Casa Editrice Sociale, 1921.
- Raouf Tantawy, Marwa Abdel Moneim Abdel. “Il fascino del mondo orientale in *L’Oasi* di Leda Rafanelli.” *Critica Letteraria*, no. 149, 2010, pp. 750–776.
- Rossetti, Sara. “Orientalismo al femminile. La visione dell’oriente islamico in alcuni scritti inediti di Leda Rafanelli (1880–1971).” *Itinera: nuove prospettive della ricerca storica e geografica*, edited by Arturo Gallia, CISGE, 2016, pp. 159–167.
- Senta, Antonio. *Utopia e azione: per una storia dell’anarchismo in Italia (1848–1984)*. E-book ed., Elèuthera, 2015.
- Spackman, Barbara. “Muslim in Milan: The Orientalism of Leda Rafanelli.” *Orientalismi italiani*, vol.1, edited by Gabriele Proglgio, Antares, 2012, pp. 74–89.
- . “Muslim in Milan: The Orientalisms of Leda Rafanelli.” *Accidental Orientalists: Modern Italian Travelers in Ottoman Lands*. Liverpool University Press, 2017, pp. 154–210.
- Willson, Perry. *Italiane: biografia del Novecento*. E-book ed., Laterza, 2020.

勝田由美「自由主義期の女性運動」『教養のイタリア近現代史』土肥秀行，山手昌樹編，ミネルヴァ書房，2017年，pp.101–112.

キンナ, ルース『アナキズムの歴史—支配に抗する思想と運動』米山裕子訳, 河出書房新社, 2020年.

戸田三三冬『平和学と歴史学—アナキズムの可能性』三元社, 2020年.

横山隆作『イタリア労働運動の生成(1892年～1911年)』学文社, 2001年.